

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494



和歌山県中辺路・近野中学校 (5月15日)

開館十八周年にあたって

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

六月十日は第五福竜丸展示館が開館して十八年になります。今年にはビキニ水爆実験被災事件の四十周年、明年は第二次世界大戦終結五十年、広島・長崎五十年に当り、戦争と平和に関する各種の記念行事が内外で行なわれています。六月六日にはフランスのノルマンディーでDデー五十周年記念式典が開かれました。しかし、原水爆をテーマにしたものや核兵器廃絶を

指向したものはひじょうに少ないように思えます。日本国民が声をさらに大にして世界にアピールしなければならぬと痛感させられる所です。私たちが第五福竜丸平和協会では、三月一日のビキニデーに先だって「ビキニ事件四十周年と平和」と題する記念シンポジウムを開催し、ビキニ事件の被害が国際的なひろがりをもっていることを改めて確認するとともに、戦後の核軍備競争が人びとにもたらしたさまざまな被害、放射能人体実験の事実さえもがクロースアップされているいま、ビキニ被害の全容を解明しあわせてビキニ事件の全体像を正しく把握することがますます重要になっていくと指摘しました。私たちはこのシンポジウムを皮切りに、これからのこの問題をねばりよく追求したいと考えます。今年には国際家族年、人間愛についてしばしば語られます。しかし、広島・長崎やビキニ事件等の被害者の現状と苦悩に目を向けるとき、いまのままでは社会や国が本心にハートをもってこれらの被害者たちに接しているといえるだろうか、何か重要なものが忘れ去られているように思えてなりません。まもなく二十年を迎えようとする第五福竜丸展示館は、人びとが平和の価値を見つめ直すこの時期に、つぎの二十年、四十年へ向けて思い切った飛躍と発展をとげなければならぬ段階にきています。訪れるたびにつねに人びとに新たな感動と平和な未来への夢をあたえる展示館をめざして、さらに励みたくいと考えます。皆様のご理解とご支援・ご鞭撻をひきつづきお願い申し上げます。

会うと、そのままふーっと昔にもどっていくのね。父の亡き後、船主として一九五七年七月に父が亡くなり、私があとをつぎました。弟はまだ小学生でした。当時女性の船主は私一人でした。同じことをしても好きでは達うんです。男だったら、船に乗って行っただろうが、結局人にお願ひするしかないし、人にながしてもらうしかない。最初は小さいカツオ船から始めて、五九年に主人と結婚してから、やっぱりマグロ船をやるうって。父が始めた時は時代の最先端でしたが、今度は焼津の中では一番遅いスタートでした。今の船は号数がなく、ただの「福竜丸」で、十二年位使っています。乗組員は、若い子は十八、九から四十五、六の間です。今度の航海にも学校出たての、ずぶの素人さんが二人います。お陰様でうちは乗組員の出入りが少ないです。二十年以上の人が大勢います。焼津の人は少ないです。沖繩、熊本、高知などいろいろな所から来ています。前回の航海は早かったです。去年の五月に出港して、今年の三月の終わりに帰港しました。「第五」の頃は、五十日位でした。

が、今はその位行かないと漁がないんです。一日何本というのを溜めて急速冷凍して、一六ヶ月という時もあるんです。大きなものをしよった名前十年位前、主人がフランスの片田舎に補給に入った時、普通なら日本の船が入っても記事にならないのに、「福竜丸が入りました」って新聞に載ったそうです。世界でみんな気にしてくる事だから、福竜丸という船はやめては駄目だなど、その時主人は実感したそうです。これからもマグロ船が大変になって、小さい船になっても福竜丸でいようねと、主人と話しています。福竜丸ってこんな大きなものを背中にしよった名前だから、やっぱりそうなんだな。こうして続けていくことがあって初めて、みんなが福竜丸やっているんだと思うから。使命感でしょうね。やらなきゃと。息子にもやるきやないんだよと、言っています。のれんを守るということ。父親の後を継いだものれんを守ること。ことです。だから、あの事件は「第五」の話ねというんです。「福竜丸」は現在ありますから。いま商売しているからいいじゃないのかな、「第五」の船方もだか



「福竜丸」の若き乗組員たち

らいいんじゃないかなって。「船どうしている」「漁の具合はどうだ」って、今も気にしてくれま。 「第五」の人とのコミュニケーションは、私が父の代わりをしなきゃならない、そんな気持ちがあるんで、私の務めと思っています。(次号につづく)

大学生の研修も

五月の展示館は修学旅行の中学生で華やき、五月の来館団体二七のうち八四校が中学校、愛知・和歌山・三重県をはじめ十五都府県に及びました。和歌山県田辺市の長野中学校は十四名という修学旅行でしたが、事前の学習のなかでみんなで相談して作った質問を一人一人がだして再学習しました。三重県四日市の富洲原中学校は、大石又七氏を招いて体験を聞き、記念碑前で合唱と平和宣言を行いました。奈良県立ろう学校の小さな修学旅行も例年どおり行なわれ、ちょうど一緒になった大阪堺ろう学校高等部の生徒たちと共に船の鼓動に耳をすませました。めずらしく大学生の研修もあり、山梨学院大学教育学研究会の十五名の学生が教授と共に「ビキニ事件40周年」を学習、甲板を即席の教室に熱心に討論し、立正大学藤田ゼミや日本大学林学部との研修会もありました。

協会理事会開く―決算など承認
五月二十五日、学士会館で協会の第一一七回理事会が開かれ、一九九三年度の事業報告と決算を承認しました。

水爆プラボ―実験から四〇年目の事実(二)

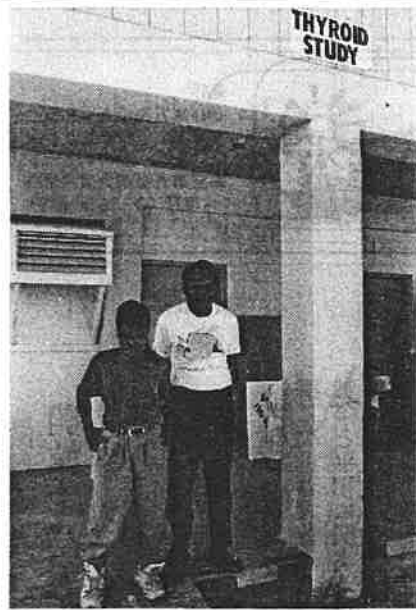
島の人々が失ったものは取り戻せない

豊崎 博光

アメリカの核実験に関する機密解除文書の内容が知られて以来、マーシャル諸島の人々の間では、プラボ―実験はロンゲラップ島やウトリック島住民を使った「核の人体実験」ではないか、という疑念が生まれている。

被曝三ヵ月後に島に戻されたウトリック島住民について一九五六年一月の原子力委員会(現エネルギー省)の会合の文書は、「放射能に汚染された環境の中で暮らす時、食物を通して、人がどのくらい放射能を吸収するかを

見ることが出来る。彼らはわれわれよりもネズミに近いのだ。この種の実験はニューヨークやパリ、ロンドンではできないのだ」(抜粋)、と書いている。また、被曝三年後に戻されたロンゲラップ島住民について、五七年の同委員会の医療報告には、「人体への放射線の貴重な生態学的データを提供するであろう」とある。被曝後、両島住民はアメリカによって血、尿の採取と甲状腺検査だけの定期検診を受けているが、検診はモルモットのような扱いで、人体実験に等しいと感じてきた人々はこの文書に大



ロンゲラップ島被曝者ニクテモス・ジャツカンの息子チレスは十年前から成長が止まっており、甲状腺の病気でとされている。マジユロ島の甲状腺検査所の前で

な怒りを表している。一方、昨年一月、クエゼリン環礁イバイ島でマーシャル諸島初の甲状腺検査が行われ、千四百人余りの対象者の中から百二十八人に甲状腺結節がみつかった(うち十六人は甲状腺ガン)。この結果は、人々を驚かせ、マーシャル諸島全域が核実験の死の灰をあげせられた証拠だとしている(四月からは、首都マジユロ島でも甲状腺検査が始まった)。

「核の人体実験」の疑い、甲状腺検査の結果が示した核実験の広範な影響をもとに、いま、マーシャル諸島ではアメリカと被曝賠償補償金の再交渉しようという動きがある。一九八六年以来、ビキニ、エニウエトク、ロンゲラップ、ウトリック島四島の住民だけが総額一億五千万ドルの補償金を受け取っているが、補償の対象をマーシャル諸島全域の人々に広げ、金額も増やそうというのである。

これに対して一部の若者の間に、「お金のことばかりいっているが、重要なことは、核実験によって島や海が汚染されたため伝統や習慣が破壊されたことで、それを元通りにしてもらおうことである」とい

う意見もある。ビキニでは除染作業が行われているが、いまなお居住は不可能である。エニウエトク島住民は帰島しているが、居住は環礁南部の四島だけに限られるという不自由な暮らしをしている。ロンゲラップとウトリック島住民は日々健康を蝕まれていく。この四島住民は、マーシャル諸島のあちこちの島に分散して暮らし、伝統的なコミュニティは崩壊している。

三月一日の朝、マジユロ島の目抜き通りに、「四〇年目の苦難。一九五四年三月一日を忘れまい。プラボ―実験の被害者」と書いたタレ幕をロンゲラップ島の若者たちが掲げた。

「冷戦が終わったといわれるが、私たちはいまなお冷戦の真只中に取り残され、その負の遺産に苦しめられている。その現実をこのタレ幕でマーシャルの人々に訴えたのだ」と若者の一人は語った。

水爆プラボ―の被曝から四〇年。核実験の被害の事実が明らかになっても、マーシャル諸島の人々が失ったものは取り戻すことができず、人々はいまなおさまよいつづけている。(フォトジャーナリスト)

ビキニ事件にかかわった三人の女性の証言 ― 第二回 へ上

福竜丸ののれんを守っていききたい (元第五福竜丸船主) 西川 一枝さん (西川角市氏長女)

四月二十八日、小雨降る焼津港をマゲロ漁船「福竜丸」(三〇〇トン)が二十二人の乗組員を乗せて出港した。今も、福竜丸はしり続けた。船を見送りつつ、第五福竜丸の船主だった故西川角市氏の長女、一枝さんに語っていただいた。

父には、お前たちは船で飯をくっているんだから、船方にはちゃんとしなくちゃならない、と子供の頃から言われました。家でご飯を食べている時でも何をしている時でも船方が来たらちゃんと対応しろ。よその船元ではどうだったかしらないけど、そういうことは

家では絶対でした。船が出港する時は必ず見送りにいきました。学校を休んでも船の出港には行けという、父でした。お前が来ると違うんだから、若い衆が喜ぶからと。だから、船の人との行き来をいつもさせてもらいました。



「福竜丸」の前に立つ西川一枝さん

あの事件の時、私は高校二年生でした。学校から帰ると、若い船方がいつものように家に来ていました。「大変なものが降ってきた」「俺このところやけどして」と、見せてもらった記憶があります。その日の夜中、読売の安部さんが戸をドンドンたたいて、事件だということでした。それからあれよあれよという間にすごい問題になってしまいました。

船方は焼津の北病院、昔の隔離病棟に入院しました。春先で、たんぼの中に一面のレンゲが咲いていて、そんな中ポツンポツンと病棟がありました。私も春休みで朝になると病院に行き、包帯を取り替えたりして手伝っていました。東京の病院にもお見舞いに

東京の病院に移ってからも毎月一回位のわりで、友達とお見舞いに行っていました。新宿で降りて、都電に乗ってまず国立(東京第二)に行き、また都電で御茶の水まで行って東大に寄って。逆に東大から国立に回ることもありました。必ず両方に行きました。

お花の水を替えたり、「焼津の方はどうだった」「こんなに手紙がきたよ」そんな話をしたりして。東大の方は結婚している人も多く、九州から奥さんがお見舞いに来てたりしていました。国立のほうは若い船方が多く、焼津に入院中から私の同級生と文通している人もいました。愛吉さんも行くこと、「おお、来たか」と。

国立病院の裏に、行くのが怖いような瓦れきの山の奥に鉄筋の傾いた宿があり、おすすさんと「今日泊まる?」「じゃあ、泊まる?」「じゃあ、先歩いて」「え、私が?」って、よくおばあちゃんやみやちゃ



焼津港を出港する「福竜丸」(4月28日)